「生きていて主を信じる者の希望」

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ 11:25,26)

先日奥羽教区総会の追悼礼拝の司式と説教の依頼を受け、少し戸惑いました。でも、考えてみれば、この総会は一人ひとりの奉仕で成っています。そう思い致し、私もその一部を担わせていただきました。

私は 56 歳で献身し、東神大 3 年に編入しました。3 年の夏休みに「夏季伝道実習」が 1 か月ほどあるのですが、私は九州の長崎古町教会に遣わされました。早速礼拝堂に案内されました。礼拝堂の正面には、大きく横にギリシャ語で何か書かれていました。「Εγώ εἰμι ἡ ἀνάστασις καὶ ἡ ζωή」(わたしは復活であり命である)。殉教と被爆の長崎の信仰者にとって、慰めと希望の御言葉であることが、この実習を通してよくわかりました。

上掲のみ言葉は、マルタとマリアの兄弟ラザロが死んで葬られ、4 日も経った後、嘆くマルタに語られたイエス様の御言葉です。25 節「死んでも生きる」とは「たとえ死んでいても」なのです。ラザロはすでに死んで 4 日も経ち臭くなっていました。しかし、そのラザロでさえも、私を信じるならば生きる、ということです。そして、26 節は、ましてや、生きているあなた、マルタ、あなたが私を信じるならば、あなたは決して死なない！イエス様は、ラザロを亡くして悲しんでいたマルタに対して、ラザロの生き返りだけではなく、マルタ自身の死を超えた希望を告げたのです。

先ほど書記より読み上げられたこの 4 年間に召された方々は皆、生きていて主を信じた方々です。ですから、「決して死なない!」のです。復活であり命であるイエス様から「決して切り離されることはない！」のです。ですから今、天にあって主の懐で安息されています。

一方、地上の席は空きが増えています。天上の席は増えても、教会は淋しくなります。私が牧会している横手教会では、昨年 4 名の兄姉が召されました。昨年の 3 月 26 日にも一人の元長老が召されましたので、5 つの席が空きました。独り、礼拝堂を見渡すと、あの席、この席、そこに座っていた姿を思い出します。ふと、自分の体のあちこちが崩れ落ちていくように感じました。

でも、思い起こしたい。毎週×2、天のみ民と共に礼拝できるのです。そしてきっとその空いた席に主は誰かを招いてくださる。だから、最期の仕事を立派に成し遂げた兄姉のその証の声を、地上の私たち教会はしっかり聞き取って、誰が招かれるか期待しながら、できることをコツコツ心を込めて伝道に励みたいと思います。

（奥羽教区総会・追悼礼拝説教要旨 2023.5.24）